KOISHIKAWA ANNEX, The University Museum, The University of Tokyo

建築博物教室
18
公開ギャラリーセミナー

2019|3|30

うつわのアーキテクチャ

―――土器誕生が物語る人類史の転換点

小髙　敬寛　(東京大学総合研究博物館　特任研究員／近東考古学)

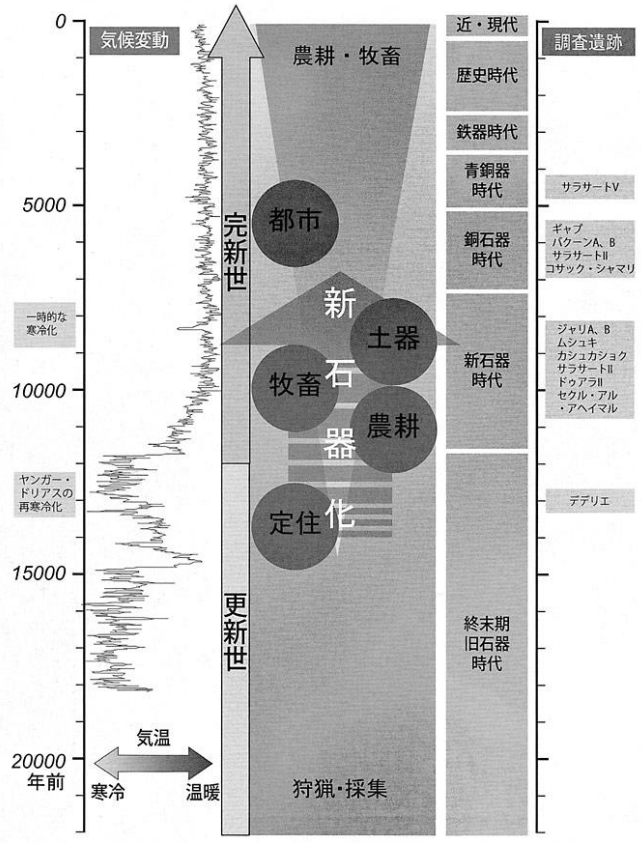
新石器化

人類は700万年前のこととも言われるその誕生以来、自然の営みによって育まれる動植物を食料資源とし、移動を繰り返しながらそれらを獲得する、遊動的狩猟採集生活を続けてきた。それを初めて捨て去って定住生活を始めたのはわずか1万5千年ほど前のことと考えられており、単純に計算すれば、ごく最近の出来事である。ただし、この出来事から現在までの短いあいだで、人びとの暮らしぶりはまさに筆舌に尽くしがたいほど劇的な変化を遂げた。

遊動生活を離れたきっかけの一つは、氷河期からの気候変化と考えられている。2万年前を過ぎた頃から、地球上の気候は温暖化に転じ、北半球の中緯度地域は総じて降水量が増加していった。結果、植物が繁茂し、さまざまな生物が棲息する生態系が生み出された。なかでも、特定の季節に収穫できる穀類や堅果類は保存性が高く、人びとにとって有用な食料資源となった。こうした豊かな植生と季節差をうまく利用することにより、少ない労力で多くを得ようとする生業戦略の結果として、定住化が進んだらしい。

定住生活によって、ヒトは居住空間に近接する環境に対して継続的に関与するようになった。それまでの遊動生活では、人間の活動によって環境や生態系に影響が出たとしても、多くは一時的なもので、人びとがよその土地に去ってしまえば元の状態に回復することができた。しかし、移動しなければそうはいかず、人間は絶えず近隣の環境に依存する。結果として、意識的にせよ無意識的にせよ、そこには人為的な生態系が育まれた。このことが、自然の恵みから食料を得る狩猟採集（獲得経済）から自らの手で食料を作り出す農耕牧畜（生産経済）へと人びとの生業基盤が転換する引き金になったかもしれないし、少なくとも前提になったと考えられている。

かつて、V. G. チャイルドは、この転換を人類の社会・経済的な進化における大きな飛躍として注目し、「新石器革命」というべき、多面的な一連の文化変化を伴う大革新であるとした。現在では、これらの変化が長い時間を通じて漸進的に起きたとみられることから、「革命」と呼べるような短期間の事件（イベント）ではなく過程（プロセス）であるとして、「新石器化」との呼びかたも一般的になっている。



西アジアの新石器化と主な東京大学調査遺跡

西秋良宏（編）『遺丘と女神―メソポタミア原始農村の黎明』14頁（東京大学出版会、2008年）

文明発祥の地・メソポタミアを取り巻く「肥沃な三日月地帯」では、おおよそ約 9 千年前までに生業基盤を獲得経済から生産経済へと転換させた社会が成立する。もはや、狩猟採集よりも農耕牧畜こそが最重要の労働となったわけであり、人びとはこの新しい生業戦略をより集約的かつ効率的に推し進めるため、大規模な耕作に向いた土地に集住した。また、多くの人口が共存するためには、周囲の自然環境に頼るだけでなく、積極的に関与し、ヒトの生活にとって都合のよい状態に改変していくことが求められた。

そして、そのような新しい生活様式は圧倒的な影響力を持ち、旧来の遊動的狩猟採集民社会を瞬く間に飲み込んでいった。こうして、現代社会へとつながるレールが人類史上に敷かれたのである。

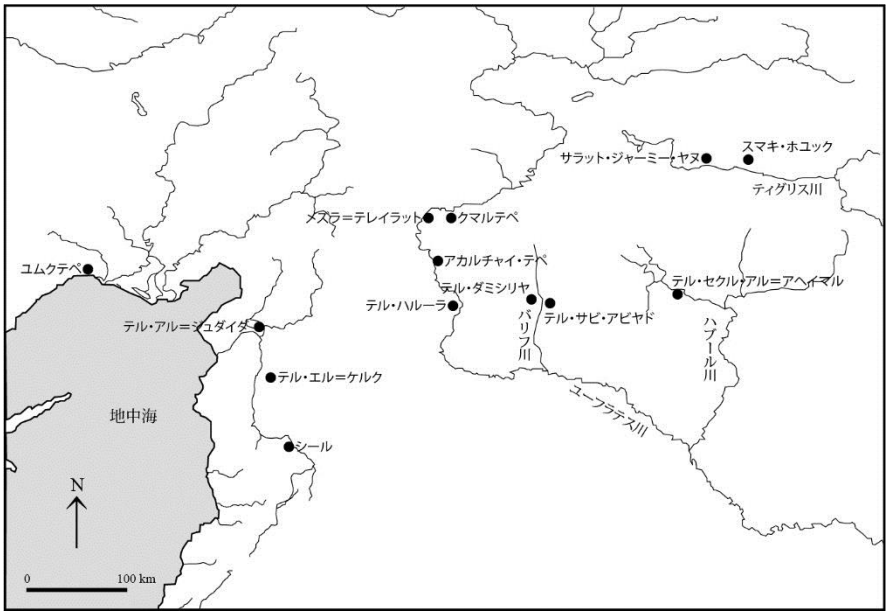
メソポタミア最古の土器

「肥沃な三日月地帯」の一角、北メソポタミア地方で本格的な土器づくりが始まるのは、生産経済が成立した直後、9 千年前を下る頃のことと考えられている。一方、東アジアでは、1 万年前までに中国東部をはじめ、日本列島やロシア極東部の広い地域に土器が普及していた。さらには最終氷期の最寒冷期の後、温暖化が進んだ前 15000 年過ぎの遺跡で、土器の存在を指摘する例がそう珍しくない。したがって、メソポタミアの人びとは東アジアに少なくとも 6 千年ほど遅れて、ようやく土器づくりを始めたというわけだ。

しかし、この年代差を工芸技術の水準の差に帰するのは、あまりに安直すぎる。土器とは「粘土を」「形づくり、焼いて作った」素焼きの「うつわ」である。カギカッコ内は順に原料、加工法、目的物を指し、土器製作技術のおもな構成要素とされる「粘土の利用」、「火熱の利用」、そして、それらによって「容器の需要を充足できるという認識」の三つと対応する。こうした視点からみた場合、「肥沃な三日月地帯」では本格的な土器づくりの開始に先立って、これら三つの要素に関連する物質文化上の発展を観察することができる。それらは取りも直さず、新石器化の進行とともにあり、技術的には東アジア同様、1 万数千年前から土器を作るだけの基盤はあった。

では、なぜ約 9 千年前という時期に始まったのだろうか。それは、新石器化によってコミュニティの人口規模が拡大し、さまざまな活動においてスケールメリットを活かした効率性の最適化が促され、工芸活動に対してもこれまで以上の労力を集約的に投下できる、あるいは投下すべき環境が整ったからであろう。想像をたくましくすれば、ある種の工芸を得意とする人物が、帰属する集団の成員に対してその技術を提供し製作物を分配するのと引き換えに、生活の維持に必要な別の労働を肩代わりしてもらうような仕組み、すなわち社会的分業が萌芽していたのではなかろうか。こうして、ある種の工芸に秀でた人物は、ますますその技術を磨くための余裕を得ることができた。彼ら・彼女らが腕を上げれば、定住生活に伴って開発され、蓄積されてきた各種資源を利用する技術の幅広い応用に弾みがつき、かねてより増大傾向が認められていた容器の需要に対処することも容易になった。その方策の一つとして、おもに建築などに使われていた石灰・石膏プラスターをうつわづくりに適用し、白色容器が作られた。同様に、土製容器と同じく粘土を素材としながら、新たに焼き締める工程を加えて、可搬性の高い土器を作り出す手法も採られたのだと想像される。

以上が現時点で考えられる、メソポタミアにおける土器製作開始の経緯と理由である。まさに、数千年間におよぶ新石器化のプロセスがもたらした結果の一つであったとも表現できるのではなかろうか。



土器の分布（前 7000～6600 年頃）